

「家族を追い詰める国」日本

カウンセリングから見えた

子どもと家庭が足元から崩壊する日本。それは貧富や地域を問わない。原因はどこにあるのか。

中尾英司 ● 家族カウンセラー

毎月10件ほど、訪問カウンセリングで全国のご家庭に伺っている。相談内容は、虐待、不登校、引きこもりなど親子問題、夫婦間の問題、パワーハラスメントなど。ほかにメールや電話カウンセリングが常時40件ほどあって、日本という国が家庭という足元から崩壊していることを実感する日々である。それは都心の豪邸から歴史ある旧家、生活保護家庭まで、都市部と地域を問わず、全国的に崩壊が進んでいる。

私がお伺いするのは普通のご家庭だが、そこには、子どもを殺して自分も死のうと思っている母親がいる。自分が男だったら父親を殺していたという娘がいる。復讐のために夫婦関係を続けようとする妻がいる。恋人を絞め殺しかけた若者がいる。生きてきた記憶がない女性がいる。自分を傷つけることで存在を確

認する人がいる……。

いかがだろうか。どのご家庭も事件や事故の一步手前にあつた。少年犯罪が相次ぐが、「誰でもいいから殺したい」と言うときは、親を殺したいときである。が、子どもは親に愛されたいので親に対する怒りや殺意は自覚されず、衝動だけが突き上げてくる。その結果、誰でもいいとなつてしまふのだ。一方、私が説明して初めて家庭の破綻に気づく親の何と多いことだろうか。新たな悲劇を出さないために、親殺しの事件事例から、子どものサインにどう気づけばよかつたのかを学んでほしい。

2004年11月24日、19歳の少年が寝ていた両親を鉄アレイで殴り殺した。この両親も、まさか自分がそういう目に遭うとは思ひもよらなかつたはずである。73ヶ国にあるとおり優秀な両親および子どもたちだつ

た。一見、どこにも非の打ちどころがないように見える家庭のどこに事件の芽が潜んでいたのだろうか。

親殺しを招いた

「お膳立て症候群」の悲劇

私の相談者にも、外では優秀な先生、医師、会社員の方がいるが、その優秀さの背景には自分の親に認められたいというドライバー（無意識に自分を駆り立てるもの）が働いていることも多く、配偶者選びから子育てに至るまで、親のお眼鏡にかなうよう行動していることがある。

事件の家も厳しく監視する祖父の下で、両親は家庭でも

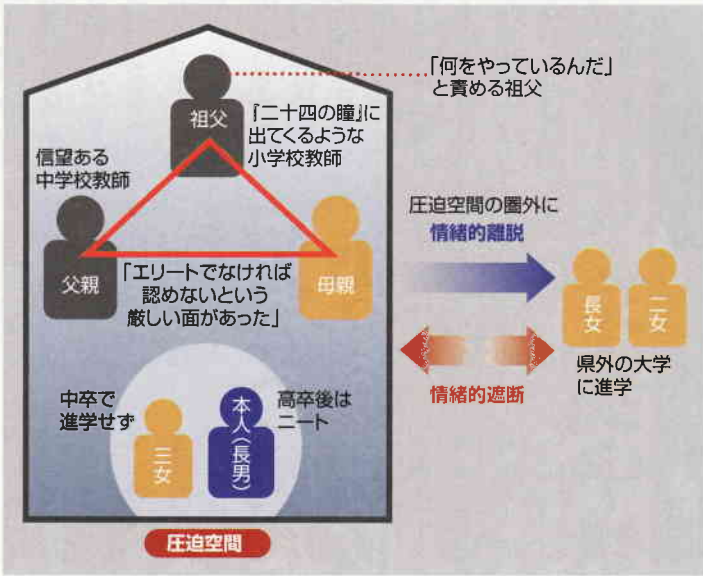
完璧な教師を続けていたのではないだろうか。

「体が小さく、おとなしく控えめでまじめだった」と近所の人が語っている。これも体や行動に表れたサインである。現在では、愛情不足が発達を阻害することが「愛情遮断症候群」として知られている。また、おとなしいことも厳しい親の下ではまみ見られることだ。つまり、子ども

19歳少年による両親殺害は、日本社会に大きな衝撃を与えた



お膳立て症候群 —水戸市19歳、両親鉄アレイ殺害事件—



も心身が萎縮しているののである。子どもは思春期になると親離れの「脱愛行動」をし始める。しかし、親が子離れできない場合、家出したりと不良と付き合ったり、故意に親との間を断つ「情緒的離脱」を始める。姉たちが県外の大学を選んだのも合法的な離脱といえるだろう。

姉2人の進学は、少年と妹への無言のプレッシャーになったことだろう。特に長男である少年へのプレッシャーがきつかったことは想像に難くない。私がお伺いしている不登校の子たちは、親の期待に応えようとして、敷かれたレールを懸命に走り

誰でもいいから殺したいは親への殺意の裏返し

続けて疲れ果てたけなげな子どもばかりだ。少年も妹も、中学で力尽きたのだろう。エリート高校に進学するも欠席が増えて、やがて不登校となり、ついにニート状態になった。

すると母親は教師を辞め、ニュージーランドに別荘を購入して少年と妹の3人で生活を始めた。この母親の行動をどう感じるかが、わが子を救えるかどうかの分かれ目となる。

てされ、後はその上を走らされるだけの人生が「自分の人生」と言えるだろうか。自分の人生は、自分で自分の行動を選択したときに初めてスタートする。この少年は、ただ親のシナリオの上を走らされ、くたくたになった。しかしゆっくりと休むことも許されず、この先もずっと親の敷くレールから逃れられないと思つたとき、「自分の人生にどこまでも介入してくる両親を亡き者にする以外に自分の生きる道はない」——これが、少年の言葉である。

少年と妹は、今はただ休みたいだけなのだ。にもかかわらず、親は放っておいてくれず、リハビリのレールを歩かせようとした。しかも、仕事を捨てて別荘まで購入したということとは、有無を言わせないということである。自ら退路を断ち、親の言うことを聞かせようとしたのである。

私は、子どもの言葉は、いつも真実を語っていると感じる。

子どもが軸の三角ゲーム引きこもりの原因は両親

先回りしてお膳立て

同じ時期、28歳の引きこもりの長男が、両親と姉を殺すという事件が起きた(74頁図参照)。父は厳しく、母は良妻賢母。世間は、「青年になってまで親のせいにする自我の弱い長男」に非難を集中させていた。しかし、私を知っている引きこもりの子どもたちはみな、親を背負うがゆえに引きこもってしまった人ばかりだった。世間が言うように親に甘え

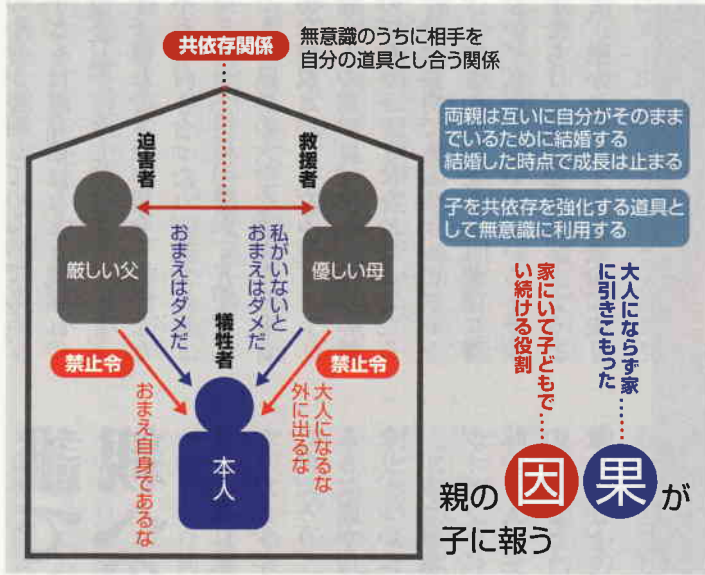
たり、わがままであるから家にいるという人間はいない。では、この青年は何を背負っていたのだろうか。多くのご家族を見てきた体験から推察してみたい。

一見すると理想的な夫婦の組み合わせだが、そこに落とし穴がある。相手のデメリット(厳しさ)が自分のメリット(優しさ)となる場合、妻は夫の厳しさを変えようとしなない場合がある。それは、夫が厳しいほど自分の存在価値が際立つからだ。そのため、自立したカップルであれば夫婦になつてから成長するが、共依存の場合は結婚した時点で互いの成長が止まる。このような罠に陥るのは、妻が親から無条件の愛情をもらっておらず、自分を認めてほしいという飢えを持っているときだ。

やがて子どもが生まれたとき、成長できない夫が父親になれず、厳しただけで子どもに当たったとしよ



■ 三角形のドラマ — 土浦市28歳長男による、両親・姉殺害事件 —



笑みの国だった日本は 130年後、キレルる国に

う。すると出番とばかりに母親が介入する。子どもは父親に責められることで、「おまえ自身であるな」という禁止令を受けるため自信を持ってなくなり、母に介入（自我代行）されると「大人になると」という禁止令を受けて自我を発達させることができない。結局、「成長せず家に居続ける」という禁止令が原因で、「家に引きこもる」という結果が現れる——当然のことだ。「親の因果が子に報う」とはよく言ったものだ。

このように迫害者（父）、犠牲者（子）、救済者（母）の三者がそろうて行われるゲームのことを「カープマンの三角形のドラマ」という。ところが、姉が孫を連れて頻繁に訪れるようになった。長男にとって、家以外に世界はない。「父や姉に生活空間を奪われて自分の居場所がない、死刑になっても父を殺すしかない」と思った。

その青年は取り調べに際して述べている。私は正確に自分の立場を表現していると思っただ。あなたの家では、子どもを軸にした三角形のゲームが繰り返されてないだろうか。そもそも「生きる」とは、どういうことか。充実した時間、悲しみに沈む時間……時間はそのときの感情とともに長くなっ

たり短くなったりする。その感情が満足するまで、その時間を費やすことが生きるということだ。しかし工業化社会は気持ちに合わせて行動するのではなく、システムに合わせて行動することを人に要求した。さらなる効率の追求は、人をロボットにしようとしている。また、労働分野の規制緩和で、働き方のタガが外れ、今や働く者の時間は完全に90度後ろにずれ込んだ。以前の午後6時が今の9時。ワーク・ライフ・バランスという言葉の登場は、生活のためにあるはずの仕事が、ついに本末転倒したことを物語る。

「豊かさ」とは何か？ 「生活する」とはどういうことか？ そして「生きる」とは何か？ 最後に「幸せ」とは？ 問題を起こす子どもたちは、大人に生き方がどこかおかしいよと体を張って訴えている。

主義、あるべき論、知識等）で自分を固め、それに沿った生き方しかできなくなるため、家族にもその価値観を押し付けていこうとする。つまり、効率至上主義の社会システムが背骨なき人間を生み、彼らが子どもを道具にすることでまた背骨のない人間を再生産……この連鎖の中で「怒り」が蓄積されていく。怒りとは、尊厳を傷つけられたときに湧く感情だからだ。「キレル」という言葉が登場して10年。「キレル大人」が登場したことは、怒りが日本社会に蔓延したことを示している。

明治期に来日した博物学者のモースは、貧しい人までも礼節や思いやりを持つていること、そして朝から晩まで子どもたちがニコニコしていることに驚嘆した。それからわずか130年後、「袖すり合うも多生の縁」だった穏やかな国は、「袖すり合うもキレルるチャンス」とばかりに、ため込んだ怒りを所構わず発散する「怒りの国」になってしまった。

なお、ひでし・1958年生まれ。化学会社で人事全般を担当した後、独立。現在、「中尾相談室」を運営。主著に「あきらめの壁をぶち破った人々」。